

幼稚園を幼児の生活に返せ

——新幼児教育の發足の ために——

倉 橋 惣 三

從來行われている幼稚園は、誰が考えても、幼児に不自然なところが多い。お互教育者は目的から出發するので、そのためには、不自然でも仕方がないということになりがちである。但し幼児にたずねてみて、彼等が、必ずしも不自然だと答える譯ではない。それは幼児という年齢がすべての生活形態にいじらしい程順應する特質を持つからでもある。しかもそれをいいことにしてそのまま平氣でいるのはわれ／＼の間違ひである。そのうえに、幼児は自然の生活を求めているものであるけれども、一面には、一種のきまりを求めざるにもあらずという所がある。明日から學校へ行くのを樂しむのもそれであり、おとなのきめた型に入れられるのを偉いように感じる所のあるものである。しかし、それにつけてこんで、幼児が、幼稚園の生活形態の不自然さを訴えないからといって、それでいゝとしておくわけにはゆかない。われわれが平氣でしている事でも、教育者でない人が見たら、よく平氣でいられますねといわれるかも知れない。われ／＼でも、幼稚園という出來上つたものから離れて、生活を生活として要求

する純粋な子供の友達として（教育者でなく）幼稚園を考えた時、不自然な感じをおこさせられずにいないだろう。毎日やつている事であり、養成所でもそうならい、それに麻痺しきつてはいるが、そこを離れて、あらためて、新しい目で自分のしていることを見なおすと、必ず不自然を感じぬわけには行かないだろう。

そこで幼稚園を保育の目的を道具にする前に、先ず子供のものにする爲には、もう一度考えなおしてみなければならぬ。幼稚園の「組」にしても、そうである。幼稚園の庭で自由に遊んでいる時「おはいり」がある。自由を樂しんでいる幼児にとつて、おはいりはやりきれない。又始まつたかと思うであろう。先生が「これからお話してあげましょう」といつて下さるのは有り難くないことはない。しかし「何の組お入り」といわれれば、砂場で面白い事をしていても、それを中斷して「組」へ行かなければならない。組へ行つたら皆の統制に服さなければならぬ。それは充分の自然とはいえない。そんなとき「幼稚園に組なかりせばのどけからまし」と

子供は思ふかも知れない。新しい教育の標語として劃一をこわせよというのも、組の劃一をこわせよというのである。

ところで「組」は幼稚園の横の人爲的ならば方である。ところが、その横のならばだが、もう一つ縦のならばびで一齊に動される。すなわち、時間的な不自然が生活形態を支配してくる。それが「保育過程」の問題になる。

まず結論的の心持をいえば幼児の生活の場所の自然な姿を「泳がせ保育」といふ切るとして、これに對して、時間的な自然の姿は「流れ保育」とでもいおうか。我々おとなの生活は必ずしも時間的に流れのまゝではない。仕事の段階で経過している。學校は教育を能率的にする爲時間制がある。その時間制によつて教科によつて分たれているのである。尤もアメリカの進歩的學校がやつているように、綜合學課で、教科の小さきみでなくなつて來るものもあるが、從來普通のしかたでは教科分けに區切つてゆく。學校とは教室々々に組分けされている場所であると共に教科々々の時間制で生活している所であるといつていゝ位である。しかしこれは自然の生活が教育する方の計劃によつて仕切られているのである。都合のいゝ方法ではあるが、生活ということからすれば不自然なことである。

○
そこで論の進め方を變えて考えてみる。前の幼稚園令も、そのものとしては何等教科的な教育ではない。大きな目的を與えてこれを實現しようという丈である。小學校令では目的を

示し、その上に教科まできまつていた。だから教科を刻銘にやらなければならなかつた。幼稚園令は大きな目的を與えた丈であつたから、若し識見の大きい人であれば、その目的に沿つて、生活そのもので目的に達するようにさせてよかつたのである。その點では、幼稚園そのものは誤をしていなかつた。しかし施行規則の中に「保育事項」があり、それが教科的なものに似ていたのである。小學校令のように、これ／＼をしなければならぬとはいはず、幼稚園令には、どこをついても、これをしなければいけないとは書いてなかつたが、とり方によつては、あいまいといえばあいまいであつた。すなわちこの「保育事項」を小學校の教科に相當するものだと考えられがちだつた。そこで小學校が教科別時間制をたてると同じに幼稚園でも保育項目別時間制をたてる風が行われた。殊に、舊い時代の幼稚園はそれで甚だ刻銘であつた。組々の入口にその保育項目別時間制がかけてあつた。その各時間には小學校のより短かいけれども、次々の時間制で幼稚園の一日がたどられることは同じであつた。これでは到底、生活が流れてゆくことも出來ず、「流れ保育」など思いもよらぬことである。

○
幼児の生活は流れ行くものである。先生の計畫がこれをさへざるものであつてはならない。例えば子供が自由に遊んでいる時、手技をせよと先生はいふ。「何故」ときくと、「まあ先生に任しておけ」と先生は答える。手技を始めてみるとそれが面白くなつて一生懸命している。すると今度は先生は

時計をみていて「やめ」という。組全體に對して、「一せいにやめ」という。折かく面白くやつてゐるのに中止されるのはやり切れない。象の鼻をつけるのに、どの位時間がかかるのか。それを中途でやめなければならぬ。象も子どもも甚だ迷惑である。今は、小學校の教育方法も更められつゝある。例えば自由研究の時間にはその子の自由作業に任せられる。これが更に進んで全體が綜合的教育になると、從來の小學校では夢にも考えなかつたような風になる。がしかし、教育の到達点をきちんとしていた點からは、それも行きかぬることがある。しかし、元來學課のない幼稚園に、そんなきちんとした一齊の教育をする必要はない。——これは前の幼稚園令の時でも常にいつたことだが、今度の學校法七章には、どこにも「保育項目」はあげてない。「保育項目」でならされて來た人は、どういふ風に保育してゐるか戸まどいする位である。項目がないから、項目で分けて行く時間割というのはない筈であるが、まだそこが戸まどいされる。そこで話しが二つになる。

その一つは傳統的し來りのまゝをつゞけるので、相變らず今まで通りにする。それも、舊いことを知らない保母さんなら、新しい心持ちですることもあろうが、舊い人は手勝手ということもあつて、どうもそうしないと保育してゐるようでないといふこともあろう。

もう一つの話は、「保育項目」がなくなつたといふ意味である。談話もなくなつた。手技もなくなつたといつたら、一

體幼稚園で何をしたらいいのだらう。そこで「自由遊びの名の下に漫然と泳がし流しておく。先生はポカントして岸に立つてゐるといふことになる。ところで、「保育項目」はなくなつたが、幼児の生活として、談話も、手技も無くなる譯ではない。「保育項目」というから事々しいが、これらは幼児の生活に本來ある物である。流れて行けば波がたつたらう。すくう波、ぶつかる波、ひつくりかえる波。畫かきはその一つ／＼をかく。海とは川とは波をたてゝ行くものである。けれども流れていく水がいろ／＼の波をつくるという丈である。芝居で波をもとにして流れをつくる。本當の波は流れの中にある。「保育項目」はやめたが生活の中には、いろ／＼の波に相當するものはある。談話も手技も、その一つ一つの波である。たゞ「保育項目」としてするかしないかである。新しい保育も前の保育のように、必ずや歌わせるでしような。これからの幼児も前の幼児のようにきつと物を作るでしような。たゞ、それを、この波／＼として切り離してしないで、生活の流れの内容として見ていく。流れを離れた波はないように。すなわち「保育項目」をやめたので、幼児の生活の中のそうした物を否定したのではない。舊幼稚園令施行規則の「保育項目を何々す」といふのは「何々をすべし」でもなかつたが、實はそれらの「保育項目」をする所が幼稚園であるといふ風に考えられがちなつた。従つて時間割も出來、「組なかりせば」と同じに、「保育項目」なかりせばのどけからましにもなつた。今度はそれを、幼児の生活

へ歸して幼児の生活の自然の流れの内容として尊重するのである。

生活は時間的に流れるものである。時間は段層に出来ない。段層から段層へと強いて移される事は不自然極まりない。スミスに、自然をたどつてはいけない。しかも、舊い幼稚園ではその段層がつくりつけになつており、その合圖に鐘をならしたりする。その合圖によつて、談話から手技へ、手技から唱歌へと一々及びこみをやつて行かなければならない。そのたびに生活はきれ／＼に切られる。幼稚園の一日は流れる生活の一日でなく、各種段層の積み重ねとなる。その一つ／＼の段層にそれ／＼がもつ教育的効果はあるう。しかし、それは生活効果ではない。

○
そこで又論の進め方を變える。流れる如くといつたところでもう一つ大事な問題がないではない。今までのべてきたのは専ら生活の面が主になつてゐる。しかし、子供は生活し、我等は教育するのである。今までは目的の方から計畫して、幼児の生活を主にしなかつたのであつた。しかも幼稚園は單なる子供の遊び場ではなく、いうまでもなく教育の場である。教育である以上幼児に對して要求がある。畫がかきたければかけばいゝというのみでなく、畫をかきという事によつて達せられる幼稚園教育の目的はこちらにある。これはやがて出来る昔の「保育項目」といへども、幼稚園教育の目的を達する手段であると私は常に説いてきた。ここに、如何に生

活は自由の流れであるといふことも、やはり目的は日々々々と達成されて行かなくてはならぬのである。一回々々の食事が一日々々の榮養となつてゆかなくてはならぬようなものである。幼児には幼児の生活をなだらかに流れさせたい。先生は先生で目的を持つてゐる。そこに問題がおこるのである。幼児の生活を先生のとりこにしてはならないし、先生が幼児の生活におぼれてはならない。そこに、眞の幼稚園が存在するのである。

そこで、流れる自然の中で目的を達しようとするにはどうするか。考え方によつてはむづかしいが、考え方によつては何でもない。生活の中にその目的を達成し得る機会をとらえればよい。目的を思いのまゝに達するように仕組んで行く事はむづかしいが、それに役立て得るチャンスはいくらでもある筈である。機会によらないと不自然になる事でも、機会にすれば極く自然になる。すなわち、幼稚園の教育原則は機会教育であるといえる。

家庭などでも何時の何時からと豫めきめて教育はしない。しかし、母はいろ／＼の用事、子どもの生活よりも家の用事に忙しいため機会をのがすことが多い。しかし幼稚園では、幼児の生活を主にして、謂わばそれを見守つてゐるのだから、機会がうまくとらえられる。これはあたり前の常識である。我々はその子供といつしよに生活してゐながらその機会をのがさず活用するようにしなければならぬ。よき保母はこの機會のとらえ方のうまい人である。機會のとらえ方、機

會をよくとらえ得る心構え、更に、機會をとらえてからの活かし方、充分研究されなければならぬことであるし、保育修業上の容易ならぬ苦心である。

○ ところで、話頭を又もとへ戻して、幼稚園の生活そのものゝ問題にかえる。機會教育ほど生活本位のものでなく、生活形態を多少教育の目的に於てつくるとしても、前にいつたように、段階にならないようにしたい。それには、だん／＼思うとこへ導いてゆくにしても、幼児をその生活から我等の欲する教育へなだらかに入らせるように工夫したらどうだろうか。これを私は便宜上「遠淺式」という。水泳に格段の興を起そうとする時は飛び込みをする。陸と海との斷層は、陸より海への移りかわりの快感をおこさせる。これは「とび込み式」である。しかしわれ／＼が海の中へむかつて靜かに歩いて行く時は、足から腰へ、胸へとわれ／＼はいつの間にか水の中にはいつている。格段に陸から海へという事はない。生活を本體とする保育は、そういうあんばいに遠淺式でなければならぬ。これを幼稚園は仕事から遊びへ、遊びから仕事へするのである。

朝子供が来る。中には子供が来た時すぐに斷層を與える人がいる。それでないとい保育をしているような氣のしない先生がある。子どももそういう癖をつけられると、しまいには斷層でないと面白くなる。參觀人の中にも、「何時から保育が始まるのですか」ときく人がいる。困つたことである。

なせもつとなだらかに、朝の生活をゆるしておくことをしないのか。そうして貰つたとき、幼児は如何に幸福であらうか。我等も又いかに幸福であらう。幼稚園の一日を自然にするかしないかも、そこから始まる。それは理想だといわれるが、理想としても教育論の理想ではなく、生活の理想である。何も幼稚園だけのことではない。例えば本當に學問の好きな人は、朝目がさめるといつのまにか勉強している。勤勉な農夫は、朝起きるとすぐ畑へ行つてゐる。子どもの場合、遊びから仕事へといつたが、遊びと仕事とはどうちがうのであらうか。幼児といつしよにいて、遊びと仕事を區別するようではいけない。一體子供は幼稚園へ、どういふ氣もちで來るのだらうか。これが問題である。子どもは朝鬼に角幼稚園へ來る。來てからの事はその上さというのだらうか。そういう子どももないではない。そうして先生の所へきて「今日の御豫定は、何の仕事でしょうか」ときく。これがそも／＼間違ひである。幼稚園はとにかく來るところではない。子どもの眞の心もちとしては、朝起きた時幼稚園の生活が目につぶ。そうして、いそ／＼と、ブランコへ砂場へ、太郎ちゃんへ來るのである。子供は「幼稚園」へ來るのではない。「どうして幼稚園へ行くの」ときかれた時「だつて面白いなだもの」と答えるのがその證據である。自分の楽しい生活へ來るのである。さつきも云つたがお百姓は畑へ行くのでなく、氣にかゝる作物へ行くのである。大學生は、大學へ行くのでなく、教授の講義へ行くのである。幼稚園の子供も、幼稚園に來る

のでなく、遊びに來、仕事に來るのである。その遊びも仕事も、子どもにとつては楽しい生活である。われ／＼は、その活き／＼した幼児の心もちから幼稚園の一日をやらなければならぬ。

遠淺式に、自分の生活から入つて來た幼稚園の一日は、だん／＼と深くもなろう。しらす／＼深みにも入ろう。また、淺くもなろう。しらす／＼淺くもなろう。その深いところは何か、淺いところは何か。それは、その子の生活感のときどきであつて、必ずしも、生活の内容ではない。まして、淺いところが自由遊び、深いところが作業といつた差別ではない。たゞ、淺くなり深くなりつゝ、海の中であることは一つである。そして、そのなかで泳いでいることも一つである。いろ／＼の形の波が來て、それに相當した泳ぎ方もあろうが、泳いでいることは一つである。しらす／＼、波にのせられ、波にのつて、のりさるのも自然であれば、浮いているのも自然である。なんらの斷層もなく、なんらの無理な出入りもない。

こうして、幼稚園の一日を自分達の生活として楽しむ。樂しむというよりも眞に活きる。それが子どもの求める幼稚園である。われ／＼は、先ず、子どもに子どもの幼稚園を與えなければならぬ。われ／＼の教育は、その上でのことである。その中でのことである。教育の目的を以て幼稚園をつくといつて、おとなの幼稚園になつてはならない。しかも、從來の幼稚園が、眞に子どもの幼稚園であらうか。勿論、子

どもは、どんな所をでも自分達のものにする。少くなくも、そうしようとする。問題は、われ／＼の幼稚園に對する反省である。幼稚園を幼児生活に歸せという語は、聊か激語に類するかも知れない。しかし、われらの反省は、自分に向つて、そういうわけずにいないものがあるまいか。

〔第三十一頁からつゞく〕

と大喜びである。こうして、子供達は「先生のお舟の沈まないのは、クレオンを塗つてあるからだろう」という考えが本當であつた事を實證したわけである。こゝに第三の型が第二の型に較べて、一段とすぐれている點がある。

一般に言つてよほど指導方法の立派な優秀な先生でも、尙第一や第二の型に止つてゐる事が多いようである。科學的な教育として反省を要することはないであらうか。

X

X

X